日本精神と國文學

藤村作

日本精神と國文學

藤村作

岩波書店

日本精神と國文學

藤村作

目次

はしがき

日本精神と國文學と云ふ標題が與へられたが、これは日本文學研究の根本問題とも云ふべき大問題で、この兩者の關係を說き起す前には先づ日本精神とは何かと云ふ點を考察し規定した上で、それが如何に日本文學の本質を規制して行つたかを具體的に觀察しなければならぬのであるが、自分には今全くその餘裕が與へられてゐないので、こゝでは單に思ひつくまゝに、日本精神の重要な面を形作つてゐると考へられる一二の要素を抽出して見て、その精神が歷史的に我が文學の上にどのやうな形をとつて現れたかを一渡り眺めて見る程度にとゞめたいと思ふのである。

一

我が國の物質文化、精神文化のすべての流れを觀察して見ると、そこに共通し一貫した若干の精神なり性格なりが見出されるのであるが、自分はこゝでは、その最も重要な根幹的な精神として「融合・調和の精神」と「傳統尊重の精神」とを揭げようと思ふ。

「融合・調和の精神」も「傳統尊重の精神」も、共に創造的精神の現れであつて、一般には守成的精神の現れではないのが、我が日本精神の一つの大きな特徵であると考へられる。尤も、文學の上でも、作者の力量の不足や、その時代の氣力の缺乏などの爲に、それが或は保守的な、或は摸倣的な、或は偶像崇拜的な態度となつて現れた場合も少

くはなかつたが、一般的にはさうではなく、全くそれと反對であつた事がすべての點に證明されると思ふ。

その點については後に言ふ事にして、さてこの「融合・調和の精神」とは大體どの樣なものであるかと云ふと、これを横にしては海外文化の巧みな攝取とその日本化、固有文化との調和ともなり、これを縦にしては前代文化の聰明な繼承、その諸長所の吸收ともなり、當然に第二の「傳統尊重の精神」とも結びつく事となるのである。

外國文化の攝取は、我が國文化史の上で常に繼續的に行はれ、且又、我が文化の成長發展の爲極めて大きな條件となつて來たものであつた。例へば精神的・思想的方面でこれをいへば、老子敎や儒敎や佛敎が上代の日本に輸入され、國情の異なる異國の文化が、巧みに、我が固有の文化と何らの矛盾衝突をも來さず吸收されて、やがては日本文化の重要な根幹とも言へる程度の融化をなすに至つてゐる。文學現象の上でこれを見れば、例へば和歌と連歌と俳諧を繋ぐ短詩形文學の展開の上に、夫々時代や社會狀態を異にするにも拘らず、諸要素の繼承が巧みに意識的に行はれて居る事などでも明かに知り得られるであらう。この事は文學意識や、創作態度や、創作の手法や、その素材に關しても同じ樣に言へようと思ふ。

第二に擧げた「傳統尊重の精神」は、第一のものと緊密につながつて居るものであるが、例へばこれが我が國の家族制度と結合すると、家の觀念の强化となつて文學上では傳授思想や家柄の重視などとなつて現れたし、文學活動の上では、文學觀に現れては貴族主義の尊重となり、技術的方面に現れては古典文學の意識的もしくは無意識的の崇敬となつて、日本文學の一つの大きな特性を形作る事にもなつたのである。

これらの精神は、日本文學發達に對して强い創造的な原動力となつたのであつたが、又一面に於ては、却つてそれを阻む障碍物となつた事も勿論無いではなかつた。例へば、海外文化の盲目的な崇拜や、前代文化の摸擬摸倣がこれ

であつて、この事は現代に至るまで、その對象こそ異なれ色々な形をとつて現れて來て居ることも看過する事は出來ないのである。しかし大體に於ては、これらの精神は創造的な力となつて日本文化の歴史の上に作用した事は否み難い事實であつたと考へられる。

尙、この二つの基本的な精神の他に、日本人の人生に對する態度の上から見ての現世主義や、趣味性の上から見ての自然愛なども擧げられると思ふ。殊に前者は、日本人一般の樂天性・好笑性や、機智に富む性質等とも聯關して、日本文學の上に大きな特性を附與して居り、例へば、機智性などは、上代から現代までを通じて、滑稽的文學は勿論のこと、和歌や俳諧の技巧上・着想上の主要な要素として、一貫して流れて居るし、自然愛にしても、融合・調和の精神に導かれて、自然と人生との緊密な融合、自然・人生・藝術の分つ可からざる統一、といふ日本文學獨特の境地を打ち出して居るのである。しかしこれらについては今は觸れぬこととして、こゝでは上述の二大精神を中心として、日本文學に現れた特徵的な性質・傾向を歴史的に摘出しながら、それとの相關關係を簡單に眺めて行かうと思ふ。

二

先づ上代の文學について考へて見よう。これは大和時代及びそれ以前と、平安時代とに分けて見るのが便利であるが、第一に生活の規範について考へると、大和時代に於ては、所謂「神ながらの道」、我が原始生活固有の無爲自然の道が存して居つたが、やがて、漢字從つて漢文學や支那思想（老莊思想や儒敎思想）、佛像經典從つて佛敎思想等が移し入れられて、漸く形式的方面のみならず思想的方面にも固有のものに影響を與へるやうになつて、平安時代に入ると、極めて稀薄ではあつたが、老莊・儒・佛の思想が固有の現實主義の中に織り込まれて、平安貴族の生活規範の一

面を形作るに至つたのである。殊に老子教の含む個人主義思想や隱逸思想や、それから派生した神仙思想などが、當時の社會の特性と符合したために、儒佛の思想よりも一層端的に貴族生活の中に取り入れられたのである。

しかしこれらは、結局知識的に攝取されたのであつて、例へば佛教なども、その根本思想としての厭世主義は、日本固有の現世主義と全く相容れない性質のものであつたから、その樣な佛教思想は拒否して、唯、佛教美術の有する豐富な技術を奪つて當代の建築・彫刻・繪畫・音樂・舞踊などに新潮を導き入れる事に力めたのであつて、精神生活上の指導原理としてそれを移し入れたのではなかつた。奈良時代の佛教には明かに道教と融合され、日本化された點が見られるし、盧舍那佛の建立は固有の現世主義思想の爲に佛教を變質せしめた事の一つの現れであり、元正・聖武帝の御代には所謂本地垂跡の說さへ打ち立てられるに至つて居る。これが日本文學の題材の上に長く影響を與へた事は今更言ふ迄もないが、固有の神道と外來の佛教とを、この樣な形で融合した所に、日本精神の特質を例示するたゞならぬ重大な意味が存するのである。又、藥師や觀音がよろこばれた事も當時の貴族生活に適合する樣に佛教が歪められた一例で、信仰の對象として取上げられた佛教は、およそこの樣な形に於て取上げられたので、その他は源氏物語や榮華物語を繙いても明かな樣に、誦經も法式もすべてが趣味生活の一要素として考へられて居たのである。勿論有り難いとか、もつたいないとか言ふ樣な表現をもしてはゐるけれども、それが決して信仰的な觀念でない事は言ふ迄もなく、唯、誦經の聲を美しい音樂として聽き、盛んな修法の有樣やきらびやかな僧侶の竝びを華美な繪畫として眺めたのであつた。更級日記に見える作者の幼時の宗教的な追想のくだりを讀んでみても、それがほんたうの信仰的意識とは認め難く、「源氏の物語一の卷よりして皆見せ給へ」と佛に念ずる程度の現世的信仰であり、或は少女時代の感傷的な趣味の對象としての佛の像、佛の國であつた。（しかし又一方に於てはその因果說なり輪廻の思想なりが、

日常の精神生活上の常識となつて融合されて來てゐる點なども見逃す事は出來ない。）この様に佛教に對しては、固有の思想との撞着を避けて、巧みにその形式的方面を攝取し或はこれを變質して、精神生活の指針として組み入れて行くといふ態度を、當代の人々は示して居たのである。

轉じて儒教を見よう。儒教の根本思想は社會の秩序保全を最大な目標として個人を否定するものであるが、これが奈良・平安の貴族社會に漲る個人主義的思想と相容れぬことは明かであつたので、唯、文學として、學問的智識として、受け入れられた。聖德太子の十七條の憲法や大寶令には明かに儒教の影響が見えるが、それも今言つた様な意味のものであつたと思ふのである。儒教が生活指針として有力なものとなつたのは後の德川時代である。それは佛教が中世に至つて信仰乃至精神規範となつたのと等しく、共に社會的な事情に由るのである。以上の如く、外來の思想體系としての道教・佛教・儒教は、上代に於ては有力な生活指導原理とはならず、巧みに、採るべきは採られ捨つべきは捨てられ、主として當代の知識生活及び趣味生活に貢獻するに至つたのであつた。そして、これら互に相反する性質を有する三者が、同時に夫々の形で受け容れられ、固有思想と矛盾するこれらが、矛盾衝突をまぬかれて攝取されるに至つた點に、先づ日本精神の融合調和による創造性を認めることが出來ると思ふのである。

この精神は古事記の全構成の上にも明かに現れてゐる。原始生活の花であつた神話や、傳説や、歷史的事實等を、極めて巧みに綜合し組み立てゝ一つの歷史記錄・敍事文學としてゐる技術なり精神なりは、あの當時としては驚異に値すると思ふ。尤も、從來の分離した神話傳説を一定の見地から統一し纏め上げる必要が、政治的に存在したからではあつたが、それにしてもあの巧みな整然たる體制は、日本精神の重要な一面としての强い融合・調和の精神なくしては想像されぬところである。又、漢字・漢文學（主として漢詩）の輸入とその日本文學への影響に關しても、所謂

な作用をなして居る。固有の文字を有しなかつた上代人が、全然語系と語の性質とを異にする漢字を採つて、巧妙にそれを變改して萬葉假名や平假名・片假名を創製し、當代文學の上にも異常な貢獻をした事は、驚嘆に値する事實である。文字を獲て記錄する技術を生んだ事は更に和歌の本質を一變し、紙上藝術としての出發點を與へて音樂と文學とを分離した上に、支那の詩と比較する意識を發生せしめて、いよ〳〵その藝術化を助長したのであるが、それは柿本人麿の詩（特にその長歌）に最も明瞭に現れて居る。卽ち口誦文學とも云へる祝詞の要素と、支那文學の影響に依る紙上藝術としての要素との緊密な融合調和が、人麿の藝術の最も大きな特質であつたと考へられるのである。その他、支那文學の諸要素・諸傾向の攝取は、萬葉に於ては極めて多く見出される。例へば創作の態度なり動機なりに關しては、侍レ宴應レ詔とか山水遊覽の際の詠歌などもそれで、前者は題詠を發生させ、後者は和歌の社交的性質を規定し、善惡功罪は別として共に長く和歌藝術の特性を形作つたのである。又、形式に關しては、修辭的技巧や構想や詩形に多く漢詩の暗示・影響を蒙つてゐる。特に長歌形式は、從來も說かれてゐる樣に、賦の影響をうけてゐるらしく思はれるのであつて、あの知識的な組み立ても決して祝詞のみからは導かれえないものゝ樣に考へられる。さうして漢詩との對比によつて、比較的單純であつた日本語に、豐富な色彩と變化とを與へて藝術的に高い水準まで引き上げることをえたのであつた。こゝにも日本精神の創造性を看ることが出來よう。

さて一般に、上代文學に於ける創作態度は如何なるものであつたかと言ふと、それは勿論前述の生活態度から直接導き出されたものであるが、大體に於て奈良朝及びそれ以前は感情の赴くまゝに從ふ「陶醉的」態度であり、平安時代はそこに知性を添加して來た「知巧的」態度であつたと槪言することが出來ると考へる。固有の生活態度としての素樸な自然主義から、文學制作に於ける陶醉的態度を生じたのは當然であつたが、その生活の成長に加ふるに外來思

想の知的な攝取に伴ふ知識主義が發生して、文學創作の態度としても知性を重んずるに至つたのは又當然の歸結であつた。しかしその知性・知巧性は大和時代の陶醉性を離れて成立したものではなく、その上に打ち立てられたものであつて、要するに素樸自然主義と形式主義・知識主義とを打つて一丸とした一段高い段階に作り上げた知巧性であつた。これらのものが生ずる美の屬性なり特質なりは、從つて明朗な純情性と優しい感傷性とであつた。大和時代文學の美は前者に相當し、平安時代文學の美は後者に相當する。そしてそれらの美の型ともいふべきものは、前者に於ては「素樸美」であり、後者に於ては「優艷美」であると考へられるのである。記紀の歌謠や祝詞や萬葉の初期の歌に表はれてゐるものがこの素樸美であり、萬葉の後期の歌や古今集の和歌や源氏物語に示されてゐるものが優艷美である。さうしてこの兩者は、個別に兩立するものではなく、素樸美の上に、外來の思想や文學等の知識的攝取に依つて馴致された知的な物の見方が、添加されて統一されたものが優艷美であつたのである。

三

平安時代の末から、鎌倉・室町時代にかけては、宮廷内では藤原氏一門の榮枯盛衰が目まぐるしく見せつけられたし、又戰亂が交々おこつて京洛はしば／＼兵火に見舞はれ、人々の生命がおびやかされ續けたために、人生のはかなさ頼りなさが、深く人々の心に刻み込まれ、「末の世」とか、「長らへま憂き世」とかいふ考へが、單なる知識としてゞなく、常識となつて來た時代であつた。この眼前の實生活から生じて來た無常遷速の觀念が、前に述べた樣に、平安時代の佛教を一變させて、趣味としての、若しくは現世利益のための佛教を、まづ信仰の對象らしいものにまで發展させるに至つたのであつて、時代の常識となりつゝあつた無常觀と、それに適合する中世佛教とが相互的に作用し合

ひながら、濃厚な厭世的・悲觀的な思潮をみなぎらせることゝなつたのである。

しかし、この生活規範としての無常觀も、日本人固有の現世主義・樂觀的傾向のために、全然人生や人力を否定し切つて、世を捨て身を殺すと云ふ樣な徹底的な厭世思想にまでは發展しなかつたのである。この事は、西行や鴨長明や實朝の態度などにもうかゞひ知ることが出來ようと思ふが、それではこの無常觀はどう云ふ方面に發展したかと云ふと、一つは消極的に、一種の神祕主義と云へる樣な思想方面に落ちて行つて、人力、個々人の存在のまことにはかなく賴み少いこと、從つて其處に人力を超越した偉大なものゝ力、超自然の神祕なものゝ存在を信じたくなり、その力の前にすべてを投げ出して縋らうとする態度を生ずることゝなつたのである。佛教の上では、絕對他力敎としての淨土教を創り出す事となり、文學について言ふと、小說では旣に前代の狹衣物語などから始つて、人意を絕した抗すべからざる運命の偉力や奇蹟的な出來事が構想上の重要な原動力として描かれる樣になつたり、和歌の上では、文學創作といふ仕事の大きな創造的意義の自覺を失うて、神佛に念じその加護に依つて名歌を得ようとする樣な態度をも生じて來ることゝなつたのである。

この無常觀の今一つの方向は、積極的に、このはかない人生の中に踏み留りながらそこに新しい生命を見出さうと努力した態度で、謂はゞ死中に活を見出し、無の中に浸り切ることによつて有を求めようとしたものである。肉體を棄てゝ永遠の生命に生きようとする武士一般の行き方は、勿論武士そのものゝ職業上の性質から直接に生じて來た觀念ではあつたが、又この時代全體の積極的な風潮とも一致するものであつた。この事は、宗教上では、あらゆる有を否定する事によつて新しい有を獲ようとする禪宗を創り出したし、文學上では、傳統に浸り切ることによつて傳統を脫し而も傳統を破壞することなしに新しい美を把握しようとする特殊な態度を生むことゝなつたのである。後鳥羽院

の御歌「見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ」には、傳統的な和歌美に對する新たなる反省の御態度が窺はれると共に、それが傳統を破りつくす様な性質のものではなく、傳統を生かさんが爲の傳統の否定といふこの時代の文學思潮の特質が端的に表はされてゐると思ふのであるが、この様な態度が、一層意識的に深められると、俊成の幽玄や定家の有心の論となるのである。叙上の、無常觀の二つの方向は、歴史的には大體消極的なものから積極的なものへと發展してゐると考へられるのであつて、この無中に有を見、死中活を獲るといふ態度は、生活態度としても文學創作の態度としても、實に我が國獨特のものであつて、具體的にはそれらがすべて傳統精神の破壞・否定ではなくして、却つてそのより大なる完成・深化であつた點に、日本精神としての力強い創造性、その融合調和の精神、傳統尊重の精神を見ることが出來るのである。

さて、かくの如くして中世に於ては、その生活規範・精神的指導の原理は、平安期の現世享樂の具として見られた佛教を變質し、そこから導き出して來た無常觀であつたが、その上に立つ文藝創作の態度は、前代の「陶醉的」態度の展開としての「知巧的」態度を否定して、それらを一段高い境地に押し上げた「苦行的」な態度であつたと言へるであらう。この事は和歌の創作態度の上にも勿論見られるが、武士的藝術としての能樂の場合に最も明かに現れて居るのである。

能樂の有して居る藝術的特質は、この苦行的態度に依つて導かれる求心的な、内部へ内部へと掘り下げて、強く深く凝結させようとする行き方で、あるものをあるがまゝに表現するのではなくして、それを締めつけ締めつけて、極めてひかへ目な、しかも張り切つた力を潜ませて、小さく外に表はせる様な性質のものである。世阿彌の言葉に、

能ニ、ヨロヅ、用心ヲモツベキコト。假令、怒レル風體ニセントキハ、柔ラカナル心ヲ忘ルベカラズ。コレ、イカニ怒ルト

モ、荒カルマジキテダテナリ。怒レルニ、柔ラカナル心ヲ持ツコト、メヅラシキコトワリナリ。―(中略)― マタ身ヲツカフウチニモ、心根アルベシ。身ヲ強ク動カストキハ、足踏ヲヌスムベシ。足ヲ強ク踏ムトキハ、身ヲバシヅカニ持ツベシ。コレハ筆ニ見エガタシ。相對シテノ口傳ナリ。――風姿花傳第七、別紙口傳――

とあるのや、又、

一曲、ふり、ふせい、よろづに付けて、心をこまかにし一身を大やうにすべし。能く能く心にかけて、定心もつべし。そうじて能は、大いたる形木(なり)より入りたる能は、こまかなるかたへもゆくべし。ちひさき形木よりそだちたる能は、大いなるかたへは、左右なくゆくまじき也。大のうちには小あり。小のうちには大なし。よくよく工夫すべし。――覺習條々、「淺深之事」――

とあるので十分うかゞひ知る事が出來る。そして、これらの態度が上述の苦行的な求心的な生活態度・創作態度のあらはれであると共に、それが、前代の生活の理想、美の理想であつた「ものゝあはれ」等の一展開であつて、所謂優美な風情を重んじて居る點をも示して居るのである。武士藝術としての美を創造するに際しても、前代の貴族藝術に於ける美に對して拒否的態度を示すことなく、(勿論、新興の藝術が舊藝術の要素を攝取しなければならぬことは、いつの場合でも避け難い事ではあるにしても、)意識的に反抗の態度を現すことなく、それらとの融合・調和を目指してゐる點は、この能樂の場合に限らず、今日までの日本の藝術史の上に現れた一特徴として注意すべきであると思ふ。世阿彌の次の言葉は、もつと明瞭にこの事を示してゐる。

抑、幽玄のさかひとは、まことには、いかなる所にてあるべきやらん。まづ世上のありさまをもて、人のしなじなを見るに、公家の御たゝずまひの、位たかく、人望よにかはれる御ありさま、是幽玄なる位と申すべきやらん。しからば、たゞうつくしく柔和なるてい、幽玄の本體也。人體(にんてい)のどかなるよそほひ、人ないの幽玄なり。又、こと葉やさしくて、貴人、上人の御なら

はしのことばづかひを、よくよくならひ、うかゞひて、かりそめなりとも、口よりいださんずること葉やさしからん。これこ
とばの幽玄なるべし。――同上、「幽玄之入レ堺事」――

又、同所に、言葉の幽玄を得んが爲には歌道を習へとも說いて居る。以上の樣な態度で作り上げられた能樂の美が、その屬性として有つものは、當然一つの押し隱された「餘韻」、「陰影」、「にほひ」の美しさでなければならぬ筈である。十のものを、その中の五・六を以て現すのであるから、殘りの四・五は一つの氣韻となつて發散するわけである。こゝに能樂藝術の「象徵性」が生ずるのである。(このことは無論、當代の和歌についても言へる。無名抄に、「言葉にあらはれぬ餘情、姿に見えぬけしき」と言はれて居るのが、それである。こゝでは唯、能の場合が最も端的にこの時代の行き方を示してゐる故に引例したにすぎない。) ついでに一言して置きたいことは、能樂がこの樣な態度を持る以上、當然「これは筆に見えがたし、相對しての口傳也」といふ如き祕傳・傳授の特性を導きがちのものであつて、この事は能樂のみに限らず、茶道にしても同じで、これ以後の日本藝術の一特徵をなすものであるとも見られるが、それはこの時期の生活態度に示唆されたかゝる創作態度が、一つの傳統となつて、苦行的な修練による制作が重視される風潮を文藝の或る分野に生ぜしめた結果であつて、古今傳授の思想などとはその本質を異にするものである。

能樂に現れた苦行的態度、傳統尊重の精神は、從つて又、美の表現樣式をも規制した。

――(前略)―― 一切ことごとく物眞似はかはるとも、うつくしく見ゆる一かかりをもつ事、幽玄のたねと知るべし。たとやゝもすれば、その物物のまねばかりをし分けたるを、至極と心えて、すがたをわするゝゆへに、左右なく幽玄のさかひに入らず。――前揭書――

物眞似の要素は重んずるが、素樸な寫實主義に止ることなく、樣式美を重視するのであつて、これは前述の能樂當

出の根本的態度から、更に溯れば當代の生活態度から、當然生じて來る結論で、能樂のその他の諸特性とは分つべからざる關係に在るものである。而して、この寫實主義と理想主義との巧緻な融合・調和も、我が文藝の上にしば／＼現れて來る現象で、勿論それ／＼の時代によつてその原因や融合の形は異なるのであるが、結局上述の日本精神の强い創造性の然らしめるところでなければならぬ。事實、現代に至る迄、西洋文學に現れた樣な徹底的な機械的な寫實主義は、我が文學史上には未だ曾て示された事がないのである。それには社會的な事情が根本的な原因をなすのであらうが、それは暫く度外視しても、寫實美と樣式美とのかゝる緊密な融合・調和を示し得たところには、獨自の精神を考へなければなるまい。

さて、以上中世に於ける生活規範・創作態度を槪觀し、その特質の中に日本精神發現の姿を眺めて見たのであるが、この時期の文藝に取扱はれる美の特性は、大和時代に於ける純情性、平安時代に於ける感傷性に對して、「靈性」とでも名づけうべきものを規定する事が出來、これは創作態度としての、「陶醉」と「知巧」との統一された「苦行的」態度から自然生ずる特性であつて、前述の如き象徵的方向に發展する傾向を藏するものである。さうして、こゝに生ずる美の型は「淡雅美」と稱しうべきものであつたと思ふ。

四

近世は、社會的にも、從つて又文學思潮の上でも、他の時代とは稍〻異なつた特異性を有する時代であると思ふ。即ち、武士の支配する社會である點では前代と異ならぬが、その下に平民の階級が勃興し、それが經濟方面は勿論のこと、文學の方面でも、その他あらゆる藝術、精神的文化の分野に於ても主役的な働きを演じたのであつて、鎌倉室

町時代では、武士の文藝と言つても、主として武士本來の職務柄のために、武士獨自の文藝といふものを創造し得てゐなかつたので、文藝方面では大體に於て、貴族文藝の繼承であつたと見ることが出來る樣である。且又、中世に於ては平民的文藝も、萠芽は已に現れて居つたが、しかし未だ嚴密に平民文藝と規定しうる如きものは勿論なかつたのであつたから、要するに、近世に於ては、上代以來唯一の文藝の流れたる貴族文藝が一先づ舞臺の背後に退き、新たに平民文藝の大きな流れがそれに入替つて正面に現れて來たのである。日本の文藝史を通觀すると、近世初頭にその第二の出發點が置かれるものと見なければならない。この意味に於て、日本精神と近世文藝との交渉も複雜微妙なものとなつて來たと思はれるのである。

　この時代の生活規範は、儒教が中心となつたと考へる事が出來る。早く上代に輸入された儒教には、國民生活の指針としての採るべき要素を發見する事が出來なかつた爲に、從來學問知識の對象として取扱はれて來てゐたが、近世に入ると、社會的な事情のために、生活指導原理としての效用が認められ、家康の保護奬勵となつて、こゝにはじめて國民生活の中に溶け入り組織されるに至つたのである。儒教はその源を春秋戰國に發してをり、從つて亂世のやうであつた社會が安定の緒についた際に當つては、極めて適切な有效な教化機能を發揮しうべき性質を有する點で、その日本化が近世初期に至つて急速にしかも切實に行はれえたと考へられる。しかし儒教はその本質上、社會の機械的統制を重んじ個々人の情的自由を認めないと言ふ樣な一種の形式主義であつたから、この點に於て自由主義を要件とする近世の町人生活と撞着する性質を具へて居るのであつて、事實、町人生活の規範として寧ろ常識化されて來て居つたこの儒教的指針は、町人の情生活としば／＼衝突を生ずる事となつたのであつた。而して、彼等が如何にしてこの撞着を調和整理したかといふと、文藝上でこれを見れば近松の心中物などが正にその適例を示して居る。（これら

については自分もこれ迄諸書で說いて來たことであるから今は詳說を避ける。）近松の場合などは、この融合・調和に成功し、元祿期町人生活の或程度の深さ・堅實味を示して居るのであるが、時代が下るに隨つて、その融合がぎごちなくなり、機械的となつて居る場合が多い樣である。これは一に時代の故であらうと考へられるが、例へば馬琴の讀本や京傳の寛政期の洒落本などがその好例であつて、所謂勸善懲惡主義と放從な享樂的態度とが可なり窮屈に結合されてをるのを見出すのである。しかし近世生活もしくは近世文學を概括的に見れば、この二つの要素が甚だ巧みに調和・融合されて、海外移入の倫理觀と町人本來の物の考へ方とが打つて一丸とされてをる點をみとめる事が出來ると考へる。近世文學、特にその後半江戶中心期の町人文學に、「澁み」といふものが重要な一大要素となつた事については嘗て說いた事があるが、それは根本的には、やはり上述の二要素の融合といふ生活上の基礎的な態度、もしくは思惟方法の型が文學の上に現れて來たものと見なくてはなるまい。單にこの「澁み」の問題に限らず、一般にこの樣な「二重性」、內に豪華を藏し外に簡素を以て表はすと言ふ樣な態度や、「勸懲」と「なぐさみ」とを竝立せしめる等の態度は、實にこの點に根據を置く近世文學獨自の性質であらうと考へられる。

さて、この樣な生活態度の上に立つ近世文學の創作態度は如何なるものであつたかと言へば、上述の點ですでに明かな如く、「遊戲的」態度であつたのであつて、そこから所謂「戲作」といふ一つの文學觀が生じて來ることゝなつたのである。

「戲作」といふ觀念は、その具體的な意義內容について見れば、必ずしも一定せるものではなく、大體時間的に變化して居るし、文學の種類によつても亦異なつて居ると考へるのである。卽ち上方中心時代の所謂てんがう書きと江戶中心時代の戲作とでは、その內容にかなりの相違を見出す事が出來、又黃表紙や洒落本と讀本や合卷とでは、同じ

くその意義の上に隔りを發見しうるのである。黄表紙・洒落本・滑稽本の、「戯作」觀念について見れば、それは遊戯的態度のすなほな現れであつて、作者が讀者と、共に遊び共に慰まうとする性質を有するものである。作者が作中に於て作者としての姿を現はし直接に讀者に呼びかけ微笑を交さうとする樣な態度が、特に上揭の諸文學に多いのも、實にこの「なぐさみ」の文藝觀の一つの現はれであらうと思ふ。歌舞伎などに於て殊にこの態度の濃厚な事は周知である。次に、讀本に最も明瞭に現はれてゐる今一つの戯作觀について見れば、それは前述の儒教思想に導かれる勸善懲惡主義的態度に依つて、所謂「なぐさみ」としての文學の低級さを補はうとする、若しくは、糊塗し合理化しようとする觀念から成り立つて居ると思はれる。馬琴の言說には特に端的にこの態度があらはれて居る。卽ち、元來稗官小說の類は取るに足りぬが、内に勸懲の意を寓すると、婦女童幼の蒙昧を覺ますことを得しめるから又その價値少しとせぬ、と言ふ樣な見方がそれである。この樣にして、叙上の二つの「戯作」觀念は、同一の基礎に立つては居るが、後者は前者の延長に更に敎訓的要素の添加を必要とする事情の生じたため反射的に從來の觀念を見直し考へ直した結果生じた觀念であると思はれるのである。處で「てんがう」と意識したり、更に又、後者の場合の如くに、稗史は低級なものとか、妄りの著述であるなどと强く意識するのは、そこに低級ならぬ著述の存し得る事を豫想した上での意識であるべき筈である。馬琴などに於ては明かに學問上の著述を對象として戯作を考へて居つた樣であるが、これも要するに、從來の傳統的な文學、詳しく言へば貴族的文學との對比によつて町人文學を「戯作」と自遜したのに他ならないのである。しかも、この傳統的文學を以て高級な文學と信じてゐたからこそ、そこに彼等自らの文學に對する自嘲的な卑屈な評價をおのづから生ずる結果となつたのである。町人文學自身としては潑剌とした旺盛な氣魄を示しながらも、一方貴族文學に向ふ時、その傳統に對して尊いもの、高級なもの、といふ信仰を棄てることが出來なか

つた點に、日本精神としての傳統尊重の精神を看ることが出來るのであり、又、彼等がその故に、町人文藝の上に多くの貴族文藝の要素を攝取し來つた點に、やはり健康な融合・調和の精神の發現を見出すことが出來ると考へるのである。事實、近世初期から元祿に至る町人文藝創始時代に於て、貴族文學に對する反抗的な精神を示すことが甚だ少く、むしろそれを尊崇し、採るべきは採つて自家藥籠中のものたらしめようとする態度が濃厚に認められるのである。西鶴の文章や近松の淨瑠璃を見てもこの事が明かに知られる。芭蕉が「古書撰集にまなこを曝すべし」と言つたのは言ふ迄もなく貴族文學への普き理解と親炙との必要を說いたものに他ならぬ。さうして、それが單なる偶像的崇拜に墮る事なく、傳統を生かす事によつて、更に新たな生命を創造し出して行かうとする創造精神は、特にこの元祿期に強くあらはれて居るのである。

　俳諧は中人以下のものとあやまれるは、俗談平話とのみ覺えたる故なり。俗談平話をたゞさん爲なり。拙きことばかり言ふを俳諧と覺えたるは淺ましきこと也。――祖翁口訣――

と言ふ樣な詞を熟視しても、又、鬼貫が

　ことやうの句を作りて、それを新しとおもふ人は、此道を深く尋ね見ざれば、遠きさかひに入りがたくや侍らん。詞は古きを用ひ、心は新しきを用ふとこそ聞きしか。――ひとり言――

等と說き、又、丈草がその「詩歌俳諧辯」に於て、「詩歌の高みに凉み居て古人よばりする輩」が俳諧を難じて「何ぞ志を養ひ、道に赴くたよりならむや。ひとへに滑稽の雜口虛言にして、俗中の俗なるもの」と言ふに對へて、先づ和歌の尊きをも認めた上、俳諧は俳諧としての獨自の境地を有する點を述べて居る詞などにも、古典文學の傳統を重んじ、しかも尙、町人文學としての自覺に立つて、穩かな調和的な態度で古典に對して居る點を、十分に見出すことが

出來ると思はれる。俳諧を「和歌のはし」と見たり、連歌の一種と見たりする思想も一つにはこの傳統尊重の精神から來て居るのである。さうして、この傳統の內容が、かりに連歌であつても謠曲であつても、それらが畢竟貴族的文學の理想を承け繼いで成つたものであるから、結局何れにしても貴族文學の傳統に對する尊崇の觀念である事には變りはないのである。けだしこの精神の發生と繼續とには、我が國の國體と緊密な關聯があると思はれる。卽ち、日本歷史を一貫して、如何なる社會形態が成立しても、それが常に皇室と離れて成立つた事がなく、何らかの形に於て、天皇の御名に依つて政治が行はれて來たといふ過去の事實が示すやうな、特殊な歷史と深く結びついて生じた精神と見るべきであつて、しかも日本文學の最初の完成が皇室を中心とする貴族の手によつて形作られて、長くその事情が繼續され、殊に和歌などに至つては全く宮廷文學としての歷史を保持したのであつて、これらの關係が、貴族文學・宮廷文學の傳統に對する、むしろ宗教的な尊崇觀念を發生せしめたといふ事と强く關聯して居るものであらう。

さて、かくのごとく、近世生活の規範としては、町人本來の自由不羈な態度を儒教の道德律を中心に調和せしめたものを發展させ（「心學」も亦この調和的產物であつた）、その上に立つた文藝創作の態度としては、遊戲的態度を採り、そこから生ずる「なぐさみ」の要素に、儒教的立場に立つた「勸善懲惡」主義の要素を添加して、所謂「戲作」の內容を展開せしめたのであつた。さうして、そこに生れた美の特性としては、上方中心時代に於ては熱情性を、江戶中心時代に於ては感覺性を、みとめることが出來るのであつて、その美の型としては、「豪華美」と、「洒落美」もしくは「輕快美」、とも名づけうべきものを見出すことが出來ると思ふのである。さうして、前者は生活上・文學上の「粹」の有する美でもあり、又、芭蕉の俳諧に示された「閑寂味」（それは前代の苦行的態度を多くうけついでゐる所から生み出された）の有する幅の廣い美と共通するものであり、更に又、近松の淨瑠璃に現はれた情熱的な人生觀の

表現が有する深みある美とも一致するものである。又後者は、「通」の文學の内容たる「輕み」と「澁み」と「いき」との結合した所に生ずる美によつて代表されるものであつて、豪華美の一展開と見ることが出來るものである。

五

以上、思ひつくまゝに述べて見たのであるが、これを要約すると、あらゆる日本文化の發展の姿を概觀して歸納的に結論される最も特徴的な日本的精神と見なすことの出來る「融合・調和の精神」と、その内容とも見られる「傳統尊重の精神」とを先づ掲げて置いて、然る後に、これらの精神が上代から近世に至るまでの我が文學の歴史の上に、如何やうに示されて居るかを、極めて概略的に見返して見たのであつて、そのための最初の目標として各時代の生活を規制する規範について考へ、それらが固有の素樸自然主義に發して、爾後外來の道德思想・宗教思想を巧みに消化し融合して行つた有様を考へ、更に、その上に立つ文學思想もしくは創作態度の推移を眺め、それらから生ずる美の特性ならびに美の型に一言觸れて見たのである。

同様に現代文學に對しても考へて見るべきであつたが、此の度は割愛する。勿論明治以後今日に至る迄の文學の上にも叙上の精神は明かにこれを認める事が出來るのであるが、特に現代社會が、日本歴史しかも長い鎖國制によつて目隠しされて居つた特殊な近世史の舞臺から、急速に世界歴史の舞臺の上に引出される事となつたために、經濟的、政治的・社會的に明治の日本は、極めて多くのものを連續的に先進の海外諸國から攝取しなければならなかつたが、それを極めて成功的に成し遂げ得しめたものはやはり上に說いた精神であつたと考へられるのである。勿論、かの鹿鳴館時代の、行き過ぎた失敗や滑稽も亦この日本精神の現れであることは否み難く、これに類する笑ふべき摸擬や輕

薄な流行好みは今日も尚少からず見出されるのである。この精神が明治以後の日本文學の上にも作用して來たことは言ふ迄もない。外國文學との關係のみを眺めても、政治小說の時代から浪漫主義運動、自然主義運動の時代を經て、昭和の新感覺派以下の活動に至るまで、その題材・手法・表現技術・文學理論の上に、極めて多くの暗示や粉本を歐米文學に求め、一般的には、巧みにそれを吸收して、現代文學の發展を促進したのであつた事は周知の事實であらう。さうしてその活動に於ける特異な成功も若干の失敗も、亦上述の健康な創造的精神無くしては考へる事が出來ないのである。

以上の概說を明瞭にする爲に、大體の骨組みを圖示して置くこととする。(圖は印刷の都合上裏面に在る。)

	上代		中世	近世	
	大和時代	平安時代	平安末・鎌倉・室町	上方中心期	江戸中心期
美の型	素樸美	優艶美	淡雅美	豪華美	洒落（しやらく）美
美の特性	純情性	感傷性	靈性	熱情性	感覺性
創作態度	陶醉的	知巧的	苦行的	遊戯的	
生活態度並に生活規範	素樸自然〔神ながらの道〕 →	情趣的享樂的〔老子教・佛教〕 →	厭離逃避的〔佛教〕 →	官能的享樂的〔儒教〕	

昭和八年一月十日印刷
昭和八年一月十五日發行

岩波講座 **日本文學** 第十九回配本

編輯兼發行印刷者 東京市神田區一ツ橋通 岩波茂雄

印刷所 東京市神田區錦町 精興社

大森製本

發行所 東京神田一ツ橋通 岩波書店